

仙台の伝統的な門松再現展示—特徴やおもな各部の名称—

伝統的な門松とは？

仙台やその周辺で飾られていた門松は、現在全国的に見られる門松とは違い、松や竹などを門のように組み上げた形をしていました。仙台歴史ミュージアムネットワーク（歴ネット）では、そうした江戸時代の仙台の門松を再現して展示しています。施設により生木、または樹脂製のレプリカを展示していますが、ここでは門松の特徴や名称をご紹介します。

①三階松（三蓋松／さんがいまつ）

左右対称に形よく分かれた枝が三段になっている松のこと。正月飾りは三階松が基本のようですが、仙台城の門松は五段（五階）か七段（七階）でした。レプリカの松は五階松です。

②笹竹

松の上から枝葉が伸びて広がるように取り付けます。左右の松の間を横に渡し上部でつなぐのも笹竹（横木）で、葉を残す場合と、葉を取って竿状にしたものを使う場合があります。

③新柱（真柱／しんばしら）

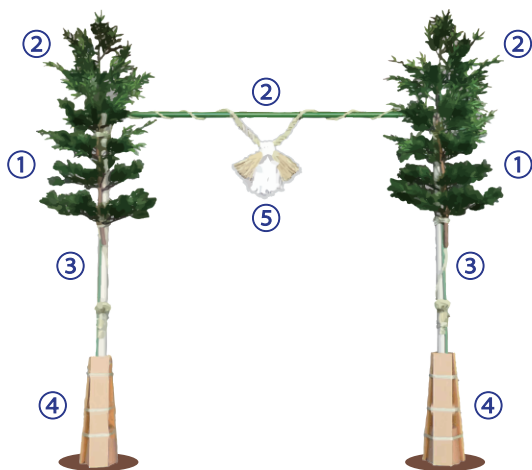
松などをくくり付ける支柱のこと。仙台城ではおもに栗の木を使いました。

④鬼打木（おにうちぎ）

新柱の根元や中央に取り付ける割木のこと。左右3本・5本の場合や根元を囲むように割木を各12本取り付ける場合もあります。仙台城では板状のものが左右各3枚でした。

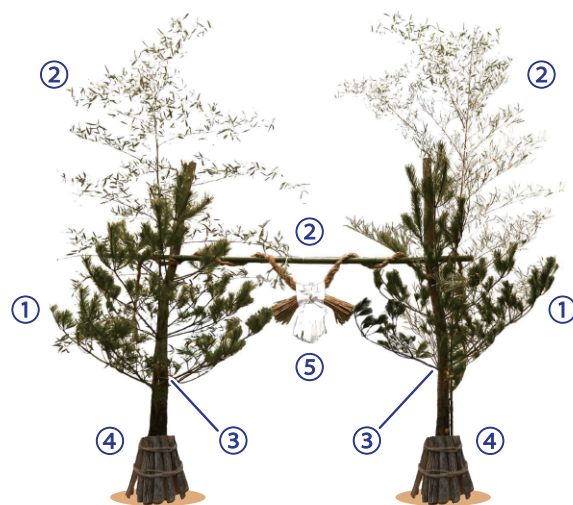
⑤ケンダイ

横木に取り付けた飾りのこと。左右から伸ばしたしめ縄を中央で交差させ、垂（垂紙／しで）を下げます。江戸時代の資料や絵画から、柚子（ゆず）や干し柿を水引で結び付け、紅を付けることがわかっています。再現展示では、作り方を習った旧家と同じく、炭や干し柿を紙で包んで中央に入れ、水引でくくり、紅で丸を三つ書いています。



レプリカ展示の場合

虫害などの心配があり、生木を持ち込むのが難しい施設では樹脂製のレプリカを展示しています。レプリカは、仙台城の門松に近いものをイメージしています。



生木展示の場合

生木の場合、松や木材の調達には専門業者に依頼しています。

江戸時代には門松用の木材を切る時は、門松を迎える作法として冷水を浴びて身を清めるなどしてから山へ入ったことがわかっています。

大事なケンダイ作り

もともと門松はその家の当主が建てるもので、ケンダイ作りも紅を付けるのも当主が行いました。歴ネットでは参加施設の職員たちが毎年ワラ打ちをしてしめ縄をない、ケンダイを作っています。

